

コジンスキー 試論

——『着色された鳥』を中心に——

井 上 勝

人間にたいするあまりに多くの愛をもつ聖人は、人間への愛ゆえに、かえって信ずべからざる神話を語るのである。なぜなら、多くの人間は耐えられない現実より、喜ばしい嘘のほうを好むからである。けれど釈迦は、人間への同情のために、彼の知恵を信じがたい神話でくもらせることを好まない。

——梅原猛『地獄の思想』

I

まずはじめに、ぼくはぼくらの堀田善衛の『方丈記私記』(1971)に触れておきたい。しかしながら、それは今ここで論じようとしているポーランド出身のユダヤ系アメリカ作家であるジャージー・コジンスキー (Jerzy Kosinski, 1933~) の『着色された鳥』(*The Painted Bird*, 1965) とそれとのあいだに影響関係が見出されるからであるというのでは無論ない。堀田善衛の「方丈記」(1212)の把握の仕方を介して、今一度「方丈記」を読み返さざるをえなくなった者が、たまたまそれを読み返したからであり、強いてもうひとつの理由を挙げるとするならば、それは、『着色された鳥』をはじめとするコジンスキーの作品を読んでいるときに、『方丈記私記』を読み返していたからである。このようなことは、しかし、つまるところは個人のささやかな読書体験のひとつの偶然でしかないであろう。しかし、そうであったにしても、ぼくとしては、どうしてもここで、たとえ一言でしかないにしても、『方丈記私記』に触れておかなければならない。

『方丈記私記』は堀田によるひとつの「方丈記」解釈ではあるのだが、彼があえて「私記」という断りを入れ、また、「私が以下に語ろうとしていることは、実を言えば、われわれの古典の一つである鴨長明『方丈記』の鑑賞でも、また、解釈、でもない。それは、私の、経験なのだ。」⁽¹⁾とその冒頭において断っているように、著者が自らの経験を、「方丈記」を、そしてまた鴨長明(1153~1216)を通過することによって再認識することの出来た「経験」を記したものである。そしてここに言う「経験」とは太平洋戦争時の東京空襲下における著者の「経

験」である。彼は東京空襲下における様々な経験を「方丈記」の世界のアナロジーとして捕え、あるいはまた「方丈記」に描きだされた種々の出来事を空襲下における彼の経験のアナロジーとして把握することによって、その自らの「経験」を一冊の『方丈記私記』として構築したのである。しかし、そのことは同時に鴨長明をも解明しなければならないことであって、彼は資料を駆使して長明をつぶさに調べあげている。そして、そのことは、堀田の言葉に従えば、「私は長明氏の心事を理解し、彼のそばに添ってみようとしてこれを書いているのだが、同時に私は長明の否定者でもありたいと思っているのである。」⁽²⁾ということになる。

だが、堀田は一人長明を解明するにとどまらず、天皇制度を基盤とした日本文化の本質をも抉りだして見せているのであり、それに鋭く切りかかっているのである。おそらくこのことが『方丈記私記』執筆の真意である。それは、堀田がひとりの生きていく人間としてあくまで一般民衆の側に立つ者であり、その立場をこそ自らの存在理由の立脚点としている者であるがゆえに、「世」を棄てた者となり、「世」を棄てた者となることによって透徹した眼で「世」を冷徹に見ることが可能になった長明のようにはなりえずに、あるいはなることを拒否して、徹底して一般民衆のそしてひとりの生きていく人間の立場から為政者にたいする批判の刃を向けていく者であるからである。彼の言う「私は長明の否定者でもありたいと思っている」ということとはこの姿勢のことである。堀田によれば、当時の天皇を中心とした皇族貴族たちの歌の世界に象徴的に見いだされる特質こそ日本文化の本質なのであり、彼はそれを名付けて「本歌取り文化」と呼ぶ。そして、それは今なおぼくらの世界に脈打っているものであり、彼は現代の世界にその所在を見だし、確認していく。それは、奥義を究めることをその故とする様々な「道」の世界、すなわち、歌道、花道、茶道であり、さらには剣道、柔道といった世界に至るまでのそういった道の世界の有様である。「創造よりは伝承」⁽³⁾を重要視しているあまりに必然的に閉鎖的で権威主義的な世界を作りだしてしまうそういった文化である。彼がその文化のそういった負の面を強調しすぎている点については殊更には触れぬとして、堀田はそこまで見極めたうえで、さらに刃を鋭くしてその「本歌取り文化」に切りかかっているのである。それは「本歌取り文化」が一般民衆の苦役を土台として成立したものであったにもかかわらず、一般民衆の現実を無視しているということを見てとったからである。そうであるばかりか、一般民衆自らもがその「本歌取り文化」に追従しているというこの文化の業の深さを見てとったからでもあるからだ。このことは、換言すれば、他の人間にたいする想像力を欠いているということであって、したがってあまりにエゴイスティックなこの文化の業が一人の生きていく人間の存在を抹殺しているのだということに彼は耐え難い憤りを覚えているということである。彼は東京大空襲下にその実相を見てしまったのである。戦争は天皇を中心とした国家首脳部によって起こされた人災であった。そしてそうであるかぎりにおいて一般民衆は被害者でしかなかった。ところが、その一般民衆は戦争という非の根本的な意味を天皇にたいして問わなかったばかりか、自らの悲惨な状態を前にしながらも、爆弾が投下され、焼けだされてしまったのも

自らの責任であったと天皇に詫びていたのである。このとき、「一人の親しい女」の身の上を案じながら大空襲を目の前にし、ただ傍観しているだけでそれにたいし何らなす術のなかった堀田は、「人間存在というものの根源的な無責任さ」⁽⁴⁾を痛切に感じたのであり、己れを介してあまりにも見事に暴露されてしまったひとりの生きている人間の実体を知ってしまって愕然としたのである。だが、彼の視座はあくまでひとりの生きている人間であることの中に据えられていたのであり、実は堀田は自らに切りかかり、その返す刀で体制にそしてその根底を雁字搦めにしている「本歌取り文化」に切りかかったのであった。このことは、繰返して言えば、堀田の個人と集団との関係においての個人の在り方についての、また集団の意味についての、問であり、解である。この書物の標題をあえて『方丈記私記』としているのもこのためである。堀田は「長明氏の心事を理解し、彼の身のそばに添ってみ」ることによって、その作業を可能にしたのである。最後に彼は長明については「歴史と社会、本歌取り主義の伝統、仏教までが、全否定をされたときに、彼にははじめて『歴史』が見えて来た。皇族貴族集団、朝廷一家のやらかしていることと、災殃にあえぐ人民のこととが等価のものとして、双方がくっきりと見えて来た。そこに方丈記がある。すなわち、彼自身が歴史と化したのである。」⁽⁵⁾と記し、長明が「方丈記」の著者の長明であることの意味を解しているのである。だがしかし、「方丈記」を虚心に読むとき、それが意図していることは、あくまでひとりの生きている人間の「内なる自然」の意味についての模索であるように思われる。長明は「方丈記」を五部に分け、(一)～(四)においては素晴らしい洞察力で「世」を見据えている。そしてそれはそれだけでも見事な読みごたえのあるものである。しかし、その意味もつまるところは、(四)にたいする枕としての役割というところであろう。つまり、(四)までは、人間とその住まう住居との有様についての記述であるということに異論はないし、事実その通りではあるのだが、読みようによっては、(一)に掲げられた前提をとにかくすれば、客観的に把握しうる「外なる世界」についてであり、そしてそれは明白に把握できる対象の世界であって、把握することが困難を極める(五)に描かれた「内なる自然」と鋭く対比させられているとも理解しうるということだ。(四)の最後において、山中の庵における閑居生活についても自信をもってその意味を主張しながら、つまり「住まずして誰かさとらむ。」⁽⁶⁾と言い放っていながら、(五)に至って、ひとたび「眼」が自己の内部に向けられるとき、あれほど断定的で鋭さを見せていた洞察力が冴えを失なっている。そして、「方丈記」が起・承・転・結のはっきりした構造をもつ文であることを考えるとき、長明の究極的に意図していたものがあくまで人間の「内なる自然」についての省察であり、(五)の部が不鮮明を極めているというのはそれが如何に困難な作業であったのかを意味しているだろう。一生もいよいよ終わりに近づき、余命も少なくなった年令に達して⁽⁷⁾もなお、解き明かしえなかった、把握しえなかった人間の実相についての長明の内実の眩きこそ「方丈記」の意味しているものであろう。そして、その作業を進めていくためにはまず「外なる世界」を、すなわち「世」を見極めなければならなかったことは言うまでもない。

II

『着色された鳥』の持つ凄まじいばかりの力に圧倒されたのはぼくだけの事情であろうか。それは、しかし、残酷で、ショッキングな世界があまりにもリアリスティックな形で描きだされているからではない。たしかに、そのように描きだされた光景には生理的嫌悪をさえ催させるものがある。それも否定できない要素ではある。しかし、そのような光景にしか注意を向けることが出来ないとするならば、それは木を見て森を見極めることが出来ないのに等しい。

『着色された鳥』に内在する力はその後に発表された『ステップス (放浪)』(Steps, 1968) や『過去のない男』(Being There, 1970) に、あるいはまた最近作である『悪魔の木』(The Devil Tree, 1973) においてもいくらか変調されているとはいえ同じような強さで維持されている。それは、言ってしまうと、「人間の偉大さ」、「人間のかぎりない進歩」、「理性の主権」などといったあまりにも人間的な幻想を一撃のもとに打砕いてしまう強烈な力である。さらに、それは、おそらく戦争を媒体とする「人間的状況」の極限を生抜いた肉体を持つ者のみが「外なる世界」をそして同時に「内なる世界」をも曇りのない透徹した眼で見極めたのちに初めて提示する人間の内奥の叫びであるといっている。ぼくらは今一度謙虚に自らの内なる声にあるいはコジンスキーの叫びに耳を傾けなければならないのだ。だがしかし、そのようにしたからといって、はたしてぼくらの内部で何かの意味を持ちはじめるというのであろうか。あるいはぼくらは何かを獲得することが可能であるというのであろうか。そのように問うこと自体があるいは空しい作業であるのかも知れないのだ。場合によっては、内なる声に忠実であろうとすることとはさらに一層混沌とした世界に出合わなければならないことであるのかも知れないのである。そして、手に負えない不可知な世界を前にして茫然と佇む己れの姿に愕然とするだけかも知れない。あるいは愕然としている己れのいることを見いだすだけまだましな状態にいたのであるのかも知れない。あらゆる可能性はすべて出口のない迷路であるのかも知れないのであり、内なる声に誠実に対処しようとするということは自己を解体することであるかも知れないのだ。『悪魔の木』におけるジョナサン・ジェイムズ・ホイイルンの世界とはこんな世界だ。どうやら、ぼくらは少しばかり先へ行き過ぎたようである。

III

「オリーブ色の肌をし、黒い髪の毛で、黒い眼をした」(olive-skinned, dark-haired, and black-eyed) (p. 3) 名も知れぬ「少年」が「1939年の秋、第二次世界大戦の最初の週に」(In the first weeks of World War II, in the fall of 1939) (p. 3) 我子の身の危険を慮った両親の配慮によって、「避難所であるとある遠方の村」(the shelter of a distant village) (p. 3) へと送りこまれる。しかし、両親の意図とは裏腹にその村は戦争からの「避難所」などではなかった。「少年」はわずかに「6歳」(six-year-old) でしかなかったのだけれども、「オリ

ヴ色の肌をし、黒い髪の毛で、黒い眼をした」人間、すなわち「ジプシーかユダヤ人の放浪者であると思なされていた」(He was considered a Gypsy or Jewish stray) (p. 4) がために様々な迫害を受けることになる。そして、彼は文字通り「放浪者」となってその地方の村々を次から次へと渡り歩かなければならなくなる。しかし、そのことはこの「少年」だけの事情ではなかったのである。彼もまた「何千という他の子供たち」(like thousands of other children) (p. 3) の一人にしかすぎなかったのである。この「少年」は最後まで名前を明かされることはなく、この作品の語り手として、自らの「肉体」で見たことを語り継いでいくのであるが、彼が最後まで匿名のままであるということは「何千という他の子供たち」のその後の体験が「少年」の体験に収斂されているということを意味しているであろう。「少年」の語る体験とは特殊な事情のために迫害されているすべての人間の体験であると言っていいのである。そして、この「少年」のように特殊な事情によって迫害されている状況にある人間こそはかならず「着色された鳥」ということになるのである。

ここで、タイトルの『着色された鳥』の意味していることに触れておこう。それは、直接的にはレックという鳥飼いが「着色した」(painted) 鳥のことである。情婦がなかなか自分の所へ現われないのに苛立ったレックは腹癒に捕えた鳥に「着色して」、それと同種の鳥の中へ放してやる。すると、その鳥は仲間の元へ帰れる喜びで彼らの中へ舞い上がっていく。ところが、その鳥たちは毛色の違った変な鳥が入りこんできたというので「着色された鳥」を無惨にも殺してしまうのである。「もし、ユダヤ人が存在しなければ、反ユダヤ主義は、ユダヤ人を作り出さずにはおかないだろう」⁽⁸⁾というヨーロッパ社会にあって、また「ここでは、ユダヤ人は一つの道具にすぎない。他の地方では、ユダヤ人の代りにあるいは黒人が、あるいは黄色人種が用いられている。」⁽⁹⁾という人間的状況にあって、さらにはそれに一層迫車をかけた第二次世界大戦のナチのユダヤ人狩りの中にあつて、「オリーブ色の肌をし、黒い髪の毛で、黒い眼を」しているのであるがために、「ジプシーかユダヤ人の放浪者であると思なされていた」この「少年」、あるいは彼と同じ状況のもとに置かれた「何千という他の少年たち」がすなわちレックの放った鳥と同じ「着色された鳥」であったというのは言うまでもない。しかしながら、ここで重要なことは、彼が「ユダヤ人である」とは書かれていないということである。彼は「オリーブ色の肌をし、黒い髪の毛で、黒い眼を」しているだけである。先にも述べたように、このことは、人間は誰であっても、その理由はどうであれ、一度「着色された」とき、「少年」と同じような立場に追いこまれてしまう危険性を常に孕んでいるということだ。それは先のサルトルの言葉を待つまでもない。そして、コジンスキーはこのような前提のもとに、つまり人間としての特殊な状況に置かれている「ジプシー」もしくは「ユダヤ人」でさえなくそのように見なされている者、すなわち「着色された鳥」に焦点を合わせることによって、『着色された鳥』を書き進めていくのではあるが、彼はそのように徹底して迫害されてばかりいる者に視座を据えることによって、人間の絶望的な状況をあばいて見せているのである。お

そらくこのことはあくまで迫害されている者に視座を据えることによって初めて可能になったのであると言換えてもいい。そしてさらに、彼は「6歳」の少年の、すなわち様々な人間的経験からは「無垢」な立場に立っているといい少年の視点に自らの視座を引絞ることによって、そのことを一層可能なものとしている。また「少年」の「無垢な視者」としての役割を明確なものとするために、「彼は教育を受けた階級の言葉を、東方の百姓たちにはほとんど理解できない言葉を話していた」(He spoke a language of the educated class, a language barely intelligible to the peasants of the east) (p. 4) という設定をしているのである。

「少年」は自らが投込まれた世界にあって、人間の意志疏通の重要な手段である言葉さえも奪われており、したがって彼は戦争を媒体とする人間の極限的状况において彼自身もそのただなかにおいて生きていく者でありながらも、完全に「視者」としての立場を付与されていることになるのである。

たしかに、戦争のもたらす人間の状況はその極限的な様相を示しているのではあるが、「少年」が投込まれた世界は戦争ばかりが原因となって生きていくのに苛酷な状況になっているのではなかった。人間の生息に重要な役割を果している風土的条件もそれに苛酷な形で加味されているのである。人間の時間を正しく踏まえて言うならば、風土的条件に戦争のもたらす様々な力が加味されていると言いなしておくべきかも知れない。

「どのような都会的な中心からも近づきにくくて離れている」(Inaccessible and distant from any urban centers) (p. 4) その地方は「唯一のおきては強い者や富める者の弱い者や貧しい者にたいする伝統的な(因襲的な)権利である」(The only law was the traditional right of the stronger and wealthier over the weaker and the poorer.) (p. 4) 世界であり、「土地はやせており、気候は苛酷である。」(The soil was poor and the climate severe) (p. 4) 世界でもあり、「極端な迷信」(their extreme superstition) (p. 4) によって支配されている「学校はなければ、病院もなく、道路はほとんどが舗装されていないのであれば、橋もほとんどなく、電気も通じていない。」(There were no schools or hospitals, few paved roads or bridges, no electricity.) (p. 4) 世界であって、そこが「少年」の投込まれた世界である。つまり、いわゆる文明社会的な要素のほとんどが剥ぎとられており、「生きながらえる」ことを前提とした生活の原質的な世界である。しかしまた、こういった世界であればこそ、逆に剥出しの人間の姿が様々な形で渦を巻き、絡みあい、もつれあっている世界であるとも言いうるであろう。「少年」は単なる傍観者としてではなく、自らの肉体をも媒体として見る「視者」としてこういった世界に投込まれているのである。したがって、村から村へと難を逃れて渡りあるく「少年」が「視」るものは人間の実体であるといっているのである。あるいは、そういった風土的・人為的な様々な要素が作りだしている人間の状況の実相であるといっているのである。そして、このような世界にあって「少年」は生きようとしているのであり、事実生きのびていくのである。恐ろしいばかりの生命力と言わなければならない。しかし、コジ

ンスキーはこういったしたたかな生命力をどうやら単に賛美しているのではない。むしろどんな状況に追い込まれても何らかの手段で、例えば他人を殺してでも、生きのびる道を見出そうとしている人間におどろきの念を抱いている。生きのびることが悪いとは言っていない。そういった善悪の判断は一切していない。哀しい眼で眺めているだけである。それは、「少年」が生きのびるために、彼を虐待し、殺すかも知れなかった人を殺し、あるいは彼を殴りとばした人に復讐を企てるのを感情的な表現を一切排除して書いている一方で、次のエピグラフを掲げていることから明らかである。それはマヤコフスキーから取ったものである。「そして、本当に全能の／神だけが／彼らは異なった種類の／哺乳動物であることを知っていた」(and only God,／omnipotent indeed,／knew they were mammals／of a different breed)。ぼくはマヤコフスキーについては全く何も知らない。したがってどのようなコンテキストにおいてこの一節が書かれているのかわからない。けれども、少なくともコジンスキーが何故その一節をエピグラフとして選んだのかについて考えるとき、次のことは言えるであろう。それは次のような解釈が可能であろう。ひとつは、滅ぼさなければならない救いようのない哺乳動物が人間であるという意味であり、もうひとつは極めて素晴らしいあらゆる可能性を秘めた賛美すべき哺乳動物こそ人間であるという意味である。そして、コジンスキーは後者に力点を置いてこの一節を取っているということが後の作品から明かされるからでもある。

それにしても、「少年」が生きのびていかなければならない状況はあまりにも苛酷であった。彼はまずマルタという老婆のところでは生活するのであるが、そのマルタというのは「病氣と苦痛には屈服しなかった。病氣や苦痛にたいしては絶え間ない、手くだを労した戦いを挑む」(Malta did not succumb to her sickness and pain. She waged a constant, wily battle against them.) (p. 9), そういった人間であった。しかし、そのような強靱な精神力あるいは生命力を持ち合わせていながらも、迷信にはめっぽう弱い局面をさらけ出す人間でもあった。このことは、しかし、彼女の場合だけではない。先にも指摘したように、この地方に住む誰でもが多かれ少なかれそうであったのである。彼らは、「ブロンドの髪をし、青い目か灰色の目をして、肌の色の白い」(fair-skinned with blond hair and blue or gray eyes) (p. 3) 村人たちは、ジプシーかユダヤ人に、すなわち同じ人間でありながらも、異種の間人間であり、彼らに害悪をもたらす者だとかたくなに信じている者に、歯の数を数えられるならば、例えば一本数えられると一年寿命が減る⁽¹⁰⁾というような、あるいは抜け毛を拾われると病気になる⁽¹¹⁾という思考で生きている。あるいは、春一番のコウノトリが飛んでいるのを見ると幸運が訪れるが、座っているのを見るといざこざや不幸の前兆である⁽¹²⁾と信じ、カッコウの鳴き声を聞き、そのときそれに対応するしかるべき処置を取らなければ、彼らの金の増減が決められてしまう⁽¹³⁾と思いこみ、殺された人間は必ず殺した相手にたいして復讐するのだということ⁽¹⁴⁾を疑わず、風が彼らの敵である⁽¹⁵⁾と決めつけ、死者の所有物を身につけていると、それが幸運をもたらすということ⁽¹⁶⁾を確信して生きているのである。そのようなことは総じて

「迷信」のなせるわざである。そして彼らは「迷信」に支配されすぎていると決めつけるのはたやすいことである。しかし、村人たちの生き方をあまりに「迷信」に支配されすぎた生き方であるとするのは、部外者の発想であり、態度であって、そのいわゆる迷信の中で生きている者たちにとっては、彼らの困ってたつ基盤を単に迷信であるとして片付けてしまうわけにはいかないのである。それはとにかく彼らが生きていくうえでの一つの基盤であり、そうであるばかりか彼らの生そのものの一部を成しているといっているのだからである。しかし、彼らがそういった迷信を信じているからといって、彼らをぼくらとは全く違う世界に生きる異種の人間、あるいはあまりにも旧時代的な人間であると断罪するのは間違っている。たしかに、ぼくらの文明社会には迷信などありはしないのだと人は言うかも知れない。そしてそのことは正しいのかも知れない。しかし、ぼくらの世界における様々な思想あるいは知識などという衣裳とはその形を変えただけで彼らの迷信と何ら違うところはないであろう。人間が生きていくためにはどこかで何かを必ずや必要としているからだ。人間のしたたかなどでも形容すべき生命力にはそういったもろさも同時にあるのだ。

ともあれ、彼ら村人たちは彼らの共同体における迷信を信じて生きている。そして彼らが何を信じて生きているのかなどという問題はたいして重要ではない。重要なことは彼らが先に述べた共同体に個有の迷信を信じて生きているということである。そして、そのことを「少年」との関係において理解すれば、村人たちは生きのびなければならないがゆえに、「少年」を迫害することになる。また、「少年」も生きのびなければならないがゆえに村人たちの歯を見ないように、あるいは抜け毛を拾わないように努力するのである。そのような努力を払わないまでも、彼は肉体的特徴のゆえにいつ殺されるのかわからない状態に置かれている。彼はまるで拷問にでもかけられているかのように、何の理由もなしに、鞭打たれ、なぐり倒されて、ついには気を失ってしまうという経験を繰返しているのである。あるいは、氷の張っている水の中に押し込まれて棒で押えつけられているのであり、あるいは肥溜の中に投込まれたりしているのである。彼が生を実感するのは肉体的な苦痛と死への恐怖を通してであるといってもいい。あるいは、コジンスキーには「少年」のそのような苦痛と恐怖を通して生きていくことの実相が視えてきたのだと言っていい。

「少年」が迫害され続けているというのは彼が共同体にとって部外者であったからばかりではなく、彼ら村人たちとは違った人間、すなわち「着色された人間」でもあったからであった。しかし、このような苦痛に喘ぎ、恐怖におののかなければならないのは「少年」だけの事情であったのだろうか。先にも述べたように、「何千という他の子供たち」もいるわけではあるが、今言いたいのは彼らのことではない。それはこの作品を理解していくうえでは言う必要もないことである。ここで言いたいのは、同じ共同体の内部にありながらも、「少年」と同じ立場に立たされている者はいないのかということだ。そのことについては単的に二つの例を挙げることができる。ひとつは個人対個人の関係において、そしてもうひとつは個人対集団の関

係においてである。前者は粉屋の下男の場合である。彼は粉屋にその妻と関係があったのではないかと疑われたがためにスプーンで両目を抉りとられる。後者は「馬鹿の」ルドミラの場合である。彼女は過去に許婚者との結婚を拒否したがために、許婚者に指図された百姓たちに輪姦され、それが原因となって馬鹿になった女である。そして今、彼女は多くの百姓たちと自由奔放に交っている。ルドミラに完全に心を奪われてしまった百姓たちは彼らの妻にあきてしまい、全く見向きもしなくなる。夫を奪われた百姓の妻たちにとって、今までの「馬鹿の」ルドミラは憎むべき敵対者となる。彼女らは各々の夫をルドミラから取戻すために、そしてこれは重要なことなのだが自らの日常的生を維持していくために、彼女を極めて残酷なやり方で殺害してしまうのである。この二つの例はあるいは特殊な例であるといえはいるかも知れない。そして、戦争に従事している者が敵であるがために彼らの側からすれば「着色された鳥」である相手方を、あるいは敵であるかも知れないと思える人たちを悲惨な方法で殺しているということ为例として挙げればよかったのかも知れない。しかし、いずれの場合であっても、その根底にあるものは自らが生きのびていくためには他人の生など全く顧みようとさえしない態度である。独善的でエゴイスティックな態度である。そういう態度は、問題が性に関わる時最も極端な形で現われる。粉屋の下男の場合がそうであったし、ルドミラの場合がそうであった。人間は、レックが鳥に「色を塗った」ように、同じ人間に「色を塗りつけて」しまうのである。そして、性が介在するときその色は一段とむごたらしい色に変わるのである。そのことは逆に性は人間にとって深部を規定する重要な要素となっていることを明らかにしている。ところが、そのような形で位置づけられる性に関して、人間はまた違った反応を示す。例えば、その享楽のために、父と娘が、兄と妹が、そして動物（山羊）と人間（娘）とが番ってさえいるのである（12章）。性を媒体として起こる出来事の例を挙げるとすれば、『着色された鳥』においてのみならず、コジンスキーにあっては枚挙に暇がない。『ステップス（放浪）』においても、『悪魔の木』においても、性は重要な位置を占めているし、『悪魔の木』のジェイムズ・ホイールンに至っては全存在が性に関わっていると言っていい程である。人間の根源的な関係性を探っていくうえで、性は、コジンスキーにとっても重要な追求の対象となっている。おそらく、その問題は彼のテーマであると言っても言い過ぎではないであろう。

性と暴力とが『着色された鳥』においては「少年」の眼を介して語られる。あるいは、自らの安全を守るために救ってやらねばならない人間を救ってやろうとしない宗教が、戦争という形でしか現われえなかった政治が、そして文学が語られる。「少年」はそれらを自らの「肉体」を介して見てきた。そしてコジンスキーは人間の根源的な問題に直面するとき、それら文明の産物が取変えようと思えば、いつでも交換が可能な衣裳にすぎないということ「少年」の経験を描きだすことによって言う。人間は今身につけている様々な衣裳を剥ぎとられ、裸にされてしまえば、皆村人たちのようで、あるいは「少年」のようでしかないのだとコジンスキーは言う。それはまた動物の中であって人間にしか当嵌らないのだということ「少年」の比較におい

て指摘する。ハトとニワトリのヒヨコとタカとの間における闘争を書くことによってそのことを明らかにしている。ここには人間の場合におけるような闘争がないと言っているのではない。弱肉強食という形での戦いが繰返されてはいる。しかし、それは異種間の闘争ではあっても同種間の闘争ではない。しかし、「着色された鳥」の例を思い浮かべて、鳥の場合も人間と同じことではないかと人は言うかも知れない。しかし、「着色された鳥」が同種の鳥たちに食い殺されてしまったのも、少なくとも他の鳥たちにとっては「着色された鳥」が異種の鳥に見えたからにはほかならない。そして、ここで重要なことは、殺された鳥にそれと同じ種類の鳥たちとは違った衣裳を与えたのは他ならぬ人間であるということだ。すべての動物が同種の者を殺し合っている人間と同じようなことをしているのではないのである。

「われわれは、狩猟人の先祖たちと基本的に同じ動物である。われわれはすべて、だれも彼も、国籍には関わりなく、その先祖から生れた。われわれはみな、同じ基本的な生物的属性を担っている。われわれは、採用した多種多様な衣裳をぬいでみれば、みな裸の猿である。」⁽¹⁷⁾とイギリスの動物学者デズモンド・モリスは指摘しているが、少なくとも『着色された鳥』にあっては、人間は裸の猿でさえないのである。

しかし、コジンスキーには人間にたいする多くの愛がある。だからこそ、彼は人間の皮相の尊厳を打碎かなければならない。虚飾に満ちた様々な衣裳を剥ぎとって、人間の実体を提示しなければならぬ。そして、彼は、性を、暴力を様々な形で描きだすことによって、人間の暗闇に潜む生きのびることへの凄まじいばかりの勢いが蠢いているどろどろとした部分へ今一度人間を解放し、そしてそうすることによって「異なった種類の哺乳動物」であることへの道を見出そうとしている。

「現代の人間という動物は、今では種に自然な条件のもとで生きているのではない。人間という動物は、動物捕獲人によってではなく、自らの輝かしい大脳の働きによって罫に掛り、自らを巨大で不安定な動物園のなかに閉じ込め、その圧力のもとで挫折する不断の危険にさらされている。」⁽¹⁸⁾とまたモリスは言うのであるが、コジンスキーが『ステップス(放浪)』のエピグラフとして『バーガヴァド ギーター』の中から次の一節を取っていることを考え合わせれば、彼の危機意識もモリスのそれと同じものであると言いうるであろう。

抑制力のない者に英知はなく、集中力もない、そして集中できない者に平和はない。そして平和のない者に、どうして幸福がありえようか。

For the uncontrolled there is no wisdom, nor for the uncontrolled is there the power of concentration; and for him without concentration there is no peace. And for the unpeaceful, how can there be happiness?

※引用文の文尾のページは『着色された鳥』におけるページ。

註

- (1) 堀田善衛著『方丈記私記』p. 3.
- (2) 同上 p. 168.
- (3) 同上 p. 225.
- (4) 同上 p. 13.
- (5) 同上 pp. 240-1.
- (6) 『方丈記・徒然草』(日本古典文学大系), p. 43.
- (7) 同上, p. 44. 参照。
- (8) J. P. サルトル著(安堂信也訳)『ユダヤ人』, p. 9.
- (9) 同上, p. 61.
- (10) Jerzy Kosinski, *The Painted Bird*, pp. 9-10. 参照。
- (11) *ibid.*, p. 10. 参照。
- (12) *ibid.*, p. 44. 参照。
- (13) *ibid.*, p. 45. 参照。
- (14) *ibid.*, p. 86. 参照。
- (15) *ibid.*, p. 157. 参照。
- (16) *ibid.*, p. 171. 参照。
- (17) デズモンド・モリス著(矢島剛一訳)『人間動物園』, p. 150.
- (18) 同上, p. 6.

テキスト

- ◇Kosinski, Jerzy. *The Painted Bird*. New York: The Modern Library, 1970.
- ◇——. *Steps*. New York: Random House, 1968.
- ◇——. *Being There*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1970.
- ◇——. *The Devil Tree*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1973.

参考書

- ◇ジャン・ポール・サルトル(安堂信也訳)『ユダヤ人』。岩波書店, 1968.
- ◇デズモンド・モリス著(矢島剛一訳)。『人間動物園』。新潮社, 1970.
- ◇堀田善衛。『方丈記私記』。筑摩書房, 1971.
- ◇西尾実校注, 『方丈記・徒然草』(日本古典文学大系)。岩波書店, 1968.
- ◇*The Bhagavad Gita*. Penguin Classics, 1974.